



**Data**

監督・脚本：マイク・リー

出演：ロリー・キニア／マキシム・ピーク／デイヴィッド・ムーア／ピアース・クイグリー／ティム・マクナニー／フイリップ・ジャクソン／トム・ギル／ジョン・ポール・ハーレイ／ヴィクトリア・モズリイ／ハリー・ヘップル／ニール・ベル／イアン・マサー／ニコ・ミラグレロ／レオ・ビル他

## 👁️👁️ みどころ

歴史に刻まれた虐殺事件はいろいろあるが、ちょうど200年前の1819年8月16日に起きたピータールーの悲劇とは？産業革命を進めるイギリスは民主主義の先進国であり、ナポレオンの帝政を打倒した民衆の国だったが・・・？

民主主義は弁論が武器。そのため弁論術が競われたが、地主であり紳士でありながら改革のために闘い続けるヘンリー・ハントの雄弁ぶりは？

他方、集会に武器を持ち込むのは絶対ダメ、あくまで平和的に！それが大原則だが、聖ピーターズ広場の集会は？今年4月から続く香港の「逃亡犯条例」改正に反対する大規模デモも、あくまで平和的に、が原則だが、もし、中国の人民解放軍が介入してくると・・・？

そんなことも視野に入れながら、200年前の悲劇の教訓を学びたい。



## ■□■ 虐殺事件あれこれ！人間は善なる存在？それとも？ ■□■

人間は善なる存在？それとも悪なる存在？「性善説」と「性悪説」を代表とするそんな論争は昔から続いているが、人間の歴史上で起きた数々の虐殺事件を知ると、少なくとも人間は善なる存在とは言えないと思えてくる。それを映画から学ぶことも多いが、とりわけ『シネマ 32』に「こんな虐殺を知ってる？韓国では？イタリアでは？」の見出しで掲載した韓国映画『チスル』(12年)(200頁)は、それまで私が全く知らなかった虐殺事件を映画から学んだものだった。

『チスル』の評論では、「虐殺事件はあちこちで。『済州島4・3』事件とは？」の見出

して、①1937年の「南京大虐殺」、②織田信長による1571年の「比叡山焼き討ち」、③1923（大正12）年の関東大震災における朝鮮人大虐殺は、レッキとした歴史上の事実と述べたうえ、④『カティンの森』（07年）（『シネマ24』44頁）にみる「カティンの大虐殺」、⑤『非情城市』（89年）（『シネマ17』350頁）にみる「二・二八事件」、⑥『光州5・18』（07年）（『シネマ19』78頁）にみる「光州事件」、⑦『セデック・バレ』（11年）にみる1930年の抗日暴動・霧社事件」における先住民セデック族の大虐殺、等の私が映画から学んださまざまな虐殺事件を紹介した。しかし、本作のタイトルである「ピータールー、マンチェスターの悲劇」とは？

## ■本作で、新たに200年前の「虐殺事件」を発見！■

外国語の日本語への読み替えは難しい。日本語では「哲学者ゲーテ」と書くのが一般的だが、表記上ではゴエテ、ギュエテ、ギューテ等、29通りの書き方があるらしい。「ギョエテとは俺のことかとゲーテいい」という面白いフレーズの文言はその典型例だが、ナポレオンの歴史上の舞台からの退場を決定的にした1815年の「ワーテルローの戦い」は現地のフランス語読みによるもので、英語読みでは「ウォータールーの戦い」らしい。

本作が描くピータールー虐殺事件は、1819年8月16日にイングランド・マンチェスターのセント・ピーターズ・フィールドで選挙法改正を求めて集会を開いていた群衆に騎兵隊が突入して鎮圧を図り、多数の死傷者が出る惨事となった事件。この虐殺は、4年前に起きたワーテルローの戦い（ウォータールーの戦い）と皮肉な対比を成すものとして、広場の名前から「ピータールーの虐殺（事件）」、あるいは「マンチェスター虐殺（事件）」と名付けられたわけだ。

そう名付けたのは、その集会に参加していた①ロンドン・タイムズ紙のジョン・タイアス（レオ・ビル）、②マンチェスター・オブザーバー紙のジェイムズ・ロウ、③雑誌記者のリチャード・カーライル等だ。彼らは虐殺が終わった後の、広場中に散らばった遺体を見ながら、一致して「ウォータールーの戦いを思い出す。しかし、聖ピーターズ広場で行われたのは徹底的な虐殺だ」と憤り、次回に発行する新聞への掲載を決意し、それを実行したわけだ。なるほど、なるほど。しかし、今からちょうど200年前の1819年8月16日に、最も産業革命が進み、最も民主主義が発達していたイギリスでなぜこんな虐殺事件が発生したの？それを2時間35分の本作からしっかり勉強したい。

## ■物語を牽引するのはマンチェスターのジョゼフ■

本作のハイライトは、大群衆に向かって騎兵隊が突入する中で起こる、怒号と混乱を描くラストのピータールーの悲劇のシークエンスだが、そこに至るまでのストーリーは、民衆側VS権力側の対立を軸として、多数の人物が登場する群像劇、歴史絵巻になっている。本作を監督したマイク・リー作品はたくさんあるが、私はそのうち『ヴェラ・ドレイク』（04

年)『シネマ8』335頁)、『家族の庭』(10年)『シネマ27』19頁)、『ターナー 光に愛を求めて』(14年)『シネマ36』156頁)の3本を観ており、その堂々としたオーソドックスな手法にはいつも感心していた。

本作は私には必見作だが、一般の日本人は何の映画かサッパリ分からないからヒットは難しいだろうと思っていたが、案の定、映画館内はガラガラだった。しかし、クライマックスに至るまでに描かれる、権力側における①摂政王太子や首相、内務大臣たちの動き、②貴族院の議員や治安判事、治安官たちの動きの描き方が極めて丁寧で興味深い。それと同じように、民衆側における①ジョゼフ(デイヴィッド・ムーアスト)家の人たちの営みと女工たちの仕事ぶり、②本作の主人公となるヘンリー・ハント(ロリー・キニア)をはじめとするさまざまな“演説家”の役割、③各地で開かれる選挙のあり方をめぐる集会の姿、④マンチェスター・オブザーバー紙、ロンドン・タイムズ紙等によるマスコミの動きも、実に丁寧に描いており、興味深い。

そんなストーリー展開の中での第1のポイントは、摂政王太子たちが1789年に起きた民衆によるフランス革命を絶対イギリスに持ち込んではいならないと考えていたこと。そのため、聖ピーターズ広場での集会が民衆による国王打倒の運動に結びつくのではないかと心配する権力側は・・・?第2のポイントは、民主主義国たるイギリスでは1679年に人身保護法が制定されていたが、他方で1715年に騒擾取締令も発布されていたこと。そのため、もっと多くの国民に選挙権を与え、年に1回は選挙を行うことを求める民衆の集会が各地で少しずつ盛り上がり、マンチェスターでの大集会でハントがどんな演説をするかが注目されてくると、権力側の恐怖も頂点に達していくことに・・・。

本作の物語を牽引するのは一介の農民の息子ジョゼフだが、本作では権力側と民衆側の多数の登場人物による群像劇、歴史絵巻をしっかり確認したい。

## ■□■民衆側と権力側の対立点は?せめぎ合いは?緊迫度は?■□■

ナポレオン戦争での勝利や産業革命の進展にもかかわらず、イギリスの庶民たちの生活は一向に楽にならなかったばかりか、逆にパンに課せられる税金や海外からの輸入を制限する「穀物法」のせいで苦しくなっていた。これは、政治家の多くが地主だからだ。その改革のためには、「穀物法」の撤廃に向けて庶民院へ申立てするとともに、選挙法を改正し、もっと多くの国民に選挙権を与え、年に一度は選挙をする必要がある。これが、改革者であるジョン・サクストン(ジョン・ポール・ハーレイ)やジョン・ナイト(フィリップ・ジャクソン)たちの主張だった。

また、別の集会でも、演説者のジョン・ジョンストン、ジョン・バグリー(ニコ・ミラグレロ)、サミュエル・ドラモンドらは、①すべてのイギリス国民を代弁するよう摂政王太子に要求し、②摂政王太子から返事がもらえなければ国王に要求し、③もし国王から返事がもらえなかった場合は、国王とその家族全員を投獄すべき、と演説していたが、これは

かなり過激なものだ。これでは、改革家内部での意見の対立が起きるのは必至であるうえ、権力側の反発を受けるのでは・・・？

本作中盤では、各地の集会での演説家の演説を軸とした民衆側の動きと、それに対する権力側の対応を描く中で、民衆側（改革側）VS緊迫した権力側の対立点とせめぎ合い、そしてその緊迫度が生々しく描かれていくので、それに注目したい。このまままでは近いうちに革命が起きるのでは？権力側がそう懸念したのは当然だが、ある日現実には、摂政王太子が馬車で宮殿へ戻る際、一人の男から馬車の窓に芋を投げつけられたから、さあ大変。これが「石か空気銃による殿下を標的とした極悪な攻撃」だったと貴族院に報告されると、貴族院は人事保護法を即時一時停止にしてしまうことに。

## ■□■マンチェスターにハントを！彼に演説を！■□■

マンチェスター・オブザーバー紙は、1818年にジョゼフ・ジョンソン（トム・ギル）、ジェイムズ・ロウ（ハリー・ヘップル）、ジョン・ナイト、ジョン・サクストンらによって創刊されたマンチェスターにある新聞紙。そこで、人身保護法の停止をどう記事にするかを検討していたところに、サミュエル・バムフォード（ニール・ベル）とドクター・ヒーラー（イアン・マーサー）が加わり、マンチェスター・オブザーバーとマンチェスター愛国者連合が主催する聖ピーターズ広場での集会にヘンリー・ハントを招待し、演説してもらうことを提案。これは、彼らが聴いたハントの演説に大いに感動したためだ。

私は1967年4月に大阪大学に入学した後、すぐに学生運動に没入したが、そこではピラづくりと共にクラス討論やマイクを握ってのアジ演説が日常だった。ピラづくりに必要なのは文章作成能力だが、アジ演説に必要なのは弁論術。元大阪府知事、市長で弁護士である橋下徹氏の弁論術は抜群だが、日本人は一般的に弁論がヘタクソ。しかし、シェイクスピアの生まれた国であるイギリスには、雄弁術に長けた人が多い。

本作中盤には前述したように弁論術に長けた雄弁家がたくさん登場してくるので、それに注目する必要がある。日本でも、明治維新から新政府成立までは剣術の腕前が意味を持っていたが、明治から大正にかけての民主主義の時代になると、問われ始めたのは弁論術。自由民権運動の中では、「板垣死すとも自由は死せず」と叫んで死んでいった板垣退助の弁論術が有名だが、オッペケペー節で有名になった新派劇の創始者である川上音二郎も、元は「自由童子」と名乗り、大阪府を中心に政府攻撃の演説、新聞発行などの運動を行ってたびたび検挙された演説家だ。

しかして、本作では、地主であり紳士でありながら、改革のために弁論だけで闘い続けているヘンリー・ハントの人物像に注目！わざわざマンチェスターの聖ピーターズ広場に招かれたハントは、そこでいかなる演説を？

## ■□■集会の目的は？武器はダメ！あくまで平和的に！■□■

本作のクライマックスに向けては、集会在1週間延期されたため、ハントがやむを得ずジョンソンの家に泊まり込むことになるシーケンスが描かれる。集会の目的は、かねてからの民衆側の要求である普通選挙のあり方の改革だが、そこにはどんな民衆がどれだけ集まり、その聴衆に向けてハントはどんな演説をするの？それが最大の注目点だが、同時に、その大規模集会是平和的に開催されなければダメ。それがハントの持論だった。ところが、ハントのもとを訪れてきたサミュエル・バムフォードは、集会に向けて地元の義勇農騎兵団が武装体制を整えていることを心配し、我々も「武装した少数の者を参加させてもいいか？」と聞いてきたから、ハントは激怒。「暴力が絡んでしまえば、集会だけでなく運動全てが台無しになる」と警告したから、サミュエルはやむなくそれに従うことに・・・。

2019年4月に香港政府が、中国本土への容疑者引き渡しを可能にする「逃亡犯条例」改正案を提出したことを契機として始まった香港のデモは、8月には香港空港を占拠する状況までに至っている。そんな中、香港政府トップの林鄭月娥（キャリー・ラム）行政長官が「香港にとって空港の重要性は説明するまでもない。暴力は香港を二度と戻れない道に追いやる」と非難したのは仕方ないが、中国政府の香港マカオ事務弁公室の報道官が、「テロリズムの兆候も現れはじめた」と批判し、香港と隣接する広東省深圳市に人民武装警察部隊（武警）を集結させているのはかなりヤバい。デモに参加する学生や市民たちの大多数は反暴力の平和姿勢を貫いているが、もし一部の参加者が武器を持ったり、過激な行動に出れば？そして、それを鎮圧するため、武警が出動することになれば・・・？

ハントの「武器は絶対にダメ！」「あくまで平和的な集会に！」という徹底したアピールによって、ジョゼフたち家族も全員、また女工たちも月曜日の仕事を休んで多くの者が参加したが、その姿は正装だ。そんな子供たちの気分はピクニックに行くようなものだったらしい。ところが、それに対して権力側では、制服を身にまとった地元の義勇農騎兵団がビールの入ったジョッキをあおって氣勢を上げていたし、騎兵連隊の兵士の集団も近くに集まっていた。また、ハントは地元の判事に会って自分に逮捕状が出ていないことを確かめたが、ハントが帰ると、治安判事たちは「ハントの逮捕状など一瞬で発行できる」とのたまっていたから、さて・・・？

治安判事たちが聖ピーターズ広場を見渡せる家に集まって議論を続ける本作の風景は興味深いが、さて、聖ピーターズ広場に何万人もの民衆が集まり、いよいよハントの演説が始まろうとすると・・・。

## ■□■これぞ虐殺！200年前の現実をしっかりと！■□■

本作のクライマックスとなる聖ピーターズ広場の集会で演説をするのは、当代NO. 1の雄弁家とされたヘンリー・ハント。彼の演説を聴いているとシェイクスピア劇を彷彿させるが、彼の演説が始まろうとするまさにその時、エセルストーン判事（ヴィンセント・フランクリン）が窓から騒擾取締令を声に出して読み上げるシーンが登場する。これは、「1

2人以上の者が暴動を目的として集会を催した場合、この法令を読み上げて解散を命じ、応じない者は厳罰に処される」という騒擾取締令所定の手続だが、ハントに拍手喝采している群衆にその声が聞こえるはずがない。

ちなみに、マイク（拡声器）がない時代、演説家はどうやって多くの群衆に自分の声を聴かせていたのだろうか？人間の声の張り上げ方には限度があるから、いくら会場が水を打ったように静かであっても、何万人もの群衆に声を届かせるのは難しいはずだ。聖ピーターズ広場の集会では、せっかく地方から長い距離を歩いて参加しながら全然舞台上のハントの姿が見えないとか、ハントの声が聞こえないという不満の声が出されていたが、そりゃそうだろう。それはともかく、本作にみる演説家たちの演説は、もちろんすべて原稿なし。橋下徹氏の演説も、田中角栄元総理の演説も、聴衆の心をわしづかみにする優れたものだったが、さて、本作のクライマックスに見るハントの（実現できなかった）演説とは？本作では、それをしっかり確認したい。

他方、集会を解散する命令書を使者に向けて窓の外に放り投げた後、判事たちは直ちにハントたちの逮捕状を発行。そして、ハントの演説がはじまるや、義勇農騎兵団はサーベルを持って人々を攻撃し始め、逮捕状を持った副治安官ネイディン（ヴィクター・マクガイア）は壇上へ上がり、ハントを引きずりおろすことに。さらに、そこに騎兵連隊の兵士たちも突入してきたから、逃げ惑う群衆は次々とサーベルの犠牲となり、ジョゼフも胸を突き刺されてしまうことに。

ロシアでは1905年1月9日に「血の日曜日事件」が発生、日本でも戦後1952年5月1日に「血のメーデー事件」が発生した。そして、中国では1989年6月4日の天安門事件。200年前の聖ピーターズ広場で起きた本作ラストが描くシーケンスはそれと同じ虐殺事件だが、その規模の大きさにビックリ。ハントたちがこの集会を開催した目的は前述の通りだが、この集会が大虐殺事件になってしまった後、普通選挙の行方は？香港のデモに万一中国の武警が介入すれば、天安門事件の悲劇が繰り返されることは明らかだが、さて・・・。

2019（令和元）年8月22日記